
永久への想い

紅蘭リト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永久への想い

【Nコード】

N2054F

【作者名】

紅蘭リト

【あらすじ】

もしも神様がいるのだとしたら。あの人を助けて下さい。過去の恋と後悔を引きずる少女は過去を塗り替えようと語り始める。少女は、真実に巡りつく。

第1話：今も空を見つめて…

貴方は今でも私の事を覚えていますか？

少しでも貴方の人生の記憶の端っこに

私という存在がいたという事を覚えていてほしい。

あの頃の私は幼くて、貴方を苦しめていたなんて分らなかった。
でも、私が貴方を愛していたという事だけは分かって下さい。

「唯愛^{ゆいあ}？早くしないと遅刻するよ？」

空は高く、見上げても果てしなく続いていく。

貴方はこの空の続く場所にいますか？

「うん！待って、すぐ行くから！」

夏が終わり、肌寒くなったこの季節はどうにも唯愛は馴染めなかった。

「もう！唯愛がゆっくり空なんか見てるから遅刻するでしょ！」

「ごめんって！」

秋華^{しゅつか}は走りながら唯愛を小突いた。

学校に着いた頃には、体が熱っていた。

「唯愛はいつも空見てるんだから。」

屋上でお昼を食べていると秋華は唯愛を軽く睨んだ。

「うん、よく空見てるよね。」

周りの取巻きも唯愛をじいつと見つめた。

真昼のこの時間は季節の変わり目でも暖かく、
皆の視線が集まると体のしんから暑くなった。

「いや…えつと…」

「ああ。あれか。愛しの恋人が空の向うに居るってか。」

取巻きの1人はイヤラシイ笑い方をして唯愛を見た。

唯愛は目を見開き、食べかけのパンを落とした。

「唯愛？」

体が硬直し、ずっと蓋をしていた思いがこみ上げてくる。

「あ…」

唯愛は急いで落としたパンを拾い上げ引きつった笑顔を作った。

「図星…？なんかあったの？」

取巻きの1人が唯愛に問いかけた。

それを、秋華が止めた。

「人には聞いて欲しくない事もあるんだよ。」

「秋華、ありがとう。大丈夫だよ。」

唯愛は空を見上げ、手をうんと伸ばした。

「私の恋人だった人はね…」

第2話：桜の咲く日の想い…

青く晴れた日に2人は出会った。

中学1年の春。

新しい街に引越し、どこにでもある市立校に入学した。

周りは小学校からの知り合いなのだろう、仲よさそうに

会話しているのを唯愛はよく覚えていた。

緊張と不安が渦を巻き俯いてただ椅子に座って大人しくしていた。

そのとき、ガタンと座っていた椅子が揺れ唯愛は勢いよく椅子から落ちた。

驚いたときには倒れていた。

「やべ！」

まだ声も変わっていない幼い声が上から聞こえた。

「痛い…！」

ひねったのか足が痛く起き上がろうとしても足が思うように動かなかった。

「おい！大丈夫か！？」

涙をためた目で上を見ると、小柄な男の子が唯愛の顔を覗いていた。

「何してんだよ、渚音^{しゅおん}！」

騒がしかった教室も唯愛がこけた事でしんと静まりかえった。

「分かってるよ！ごめん。立てる？」

渚音と呼ばれた男の子は手を差し出してきた。

男の子に連れられて保健室に行った。

先生に入学式に何してるの。と男の子は散々に怒鳴られていた。

「あの…さ。ごめん。」

唯愛の不安が一気に溢れ出し、静かに泣いた。

「…！そんなに痛い？ごめん。」

唯愛は首を振った。

泣くほど痛い訳じゃない。ただ不安で。怖くて。
この子に嫌われると思った。

嫌われるのが怖い。

だから、ずっと良い子でいて。

「大丈夫？」

唯愛が顔を上げると男の子が優しく笑っていた。

「うん…」

唯愛が頷くと男の子は唯愛の頭を撫でた。

「お前、妹に似てるわあ。」

「なにそれ。」

2人はお互いに笑い合った。

入学式に出ていない事で2人の両親が保健室に来ると、男の子は更に怒られていた。

「ごめんね…？」

「俺が悪いんじゃない。」

優しい顔を見ると男の子はニコリと笑った。

あさきしよあん
「浅木渚音。宜しく。」

あまみゆいあ
「天見唯愛です。」

桜が咲き乱れる中で2人は笑い合った。

子犬のようによく笑い、ふわふわした髪の毛の渚音。

大人しく、妹に似ている唯愛。

それが2人の印象だった。

「まあたお前と同じクラスかよ。」

渚音はわざとらしく深くため息をついた。

「それは私のセリフ！バカ渚音にの面倒見たくないわ。」

唯愛もわざとらしく深くため息をついた。

「面倒！？お前に面倒見てもらった覚えはねえな。」

「あら。そうかしら？ノート見せたり？バカな事をしたのを先生に上手く言っただげたり？感謝する事あるんじゃないの？」

唯愛が意地悪そうに笑うと渚音は苦笑いを浮かべた。

「3年間同じクラスってどんだけだよ。なあ、天見。」

仲がよかったが渚音はいつしか苗字で唯愛を呼ぶようになっていた。

「だよ。ここまで来ると怖いね。しかも渚音と、って…」

唯愛はふざけて言った。

「なんだよそれ！てかさ。いい加減苗字で呼べよ。」

からかわれるの分かってんだろ。」

「はいはい。」

唯愛は子供をなだめるように返事をした。

家に帰ると自分の部屋に駆け上がりベッドに飛び込んだ。

本当はずっと同じクラスで嬉しかった。

渚音とずっと呼びたい。

苗字じゃなくて唯愛って昔みたいに呼んでほしい。

唯愛は寝ころびながら天井を見た。

「私はずっと渚音が好きなんだ…」

手で顔をおさえた。

ずっと渚音は友達だった。

いつからだろう。

こんなに好きなのになんで今まで気づかなかったのだろう。

ねえ。

渚音。

伝えたい事がいっぱいあるよ…

第3話：もう隣にいない貴方へ…

「唯愛！同じクラスだね！！」

中学も同じだった秋華は当時から仲がよかった。

「うん。宜しくね！」

「てかさ。また浅木君と同じクラスじゃん。

好きなんでしょう？最近人気あるんだから早く告白しちやいなよ！」

秋華はあきれたように渚音を指さした。

入学当初と比べるとずっと背も高くなり、

人気があるのも分かるような気がした。

唯愛にとつてずっと見てきたはずの渚音もいつしか変わっていた。

ただ、時々みせるはにかんだ笑顔などは何ひとつ変わってはいない。

そう、思いたかった。

自分だけが知っている渚音で居て欲しかった。

「わがままだよね…」

「え？」

「あ、ごめん。何でもないの！そういえば、なんで渚音が好きって
しってるわけ～！！」

「見てたら分かるわよ。」

秋華はニヤリと笑い唯愛の頬つぺたをつついた。

「あの…！浅木先輩居ますか？」

昼休み教室でお弁当を開いていると

2年生くらいだろうか。

小柄な女の子が真っ赤な顔をして唯愛に訪ねてきた。

「うん、居るよ。」

秋華は唯愛を押しつけて返事をした。

「浅木くん！お客さんだよ！！」

秋華の声に面倒そうに渚音は女の子と一緒に教室を出て行った。

「告白かなあ？」

「私に聞かないでよ。」

告白に決まってる。

私には分かる。

だからあの子の質問にも答えられなかった。意地悪だつて分かってる。

でも、私から渚音を取らないで…

渚音は昼休みが終わる頃に帰ってきた。

「浅木！何の話だったの？」

勢いに任せて唯愛は渚音に訪ねた。

「秘密？」

「ふざけないで…」

「何怒ってんの？ただの告白だよ。」

唯愛は目を見開いた。

やっぱり。

だから嫌だったの。

「怒ってないよ…それでどうしたの？」

「もちろん付き合っに決まってるじゃん。断る理由ないだろ？」

「全然知らない子じゃん！」

渚音はため息をついた。

「俺が誰と付き合おうがお前には関係ないだろ。」

渚音…

私を見てほしいの。

もう、私を見てくれないの？

私はひどい女であの子なんていなくなれって
ずっと思っちゃうの。

渚音…嫌だよ…

「トイレ行つて来る。」

静かに立ち上がり教室を出た。

「唯愛！大丈夫？」

唯愛は秋華に背を向けながら泣いた。

震えが止まらずに足がぐくぐくと揺れ、
立っているのがやっとだった。

「私、渚音が好きだよ…。でも、あの子と付き合つて事は
私の事好きじゃないって事でしょ？」

秋華は唯愛を抱きしめた。

「私汚いの…渚音が私の傍に居てほしいって…
私だけを見てほしいって…」

もう、やだよ。」

「汚くないよ。好きなら普通だよ…」

唯愛は抱きしめる秋華を押しつけた。

「私おかしいよ！」

あの子なんて…って思っちゃうし

渚音だつて私の事可笑しいって思うよ！」

涙でぐしゃぐしゃになった顔が更にゆがんだ。

「そんな事じゃなくて…」

悔しいの…なんで私じゃないの？

こんなに好きなのに…

嫌だよ！！」

素直になりたい。

でも、なれなくて。

伝えたいのに、言葉にできなくて。
私は今も手を伸ばしていたいの…

第4話：出会わなければ良かったね…

好きだという気持ちは時には

蓋をしなければいけない時がある。

悩んで悩んで

苦しくて

声が枯れるまで泣いたとしても

気持ちを抑えるのがどんなに辛い事か。

自分を言い聞かせ、前を向くのが強さというなら

私には一生強さはないのだろう。

「唯愛！いい加減にしなよ。好きな人に彼女が出来て

辛いのは当たり前だよ？

好きだからこそ隣にいらなくても笑ってあげるのがアタの出来る事じゃないの？」

秋華は唯愛の肩をしつかりとつかんだ。

「好きなのにバイバイしなきゃ駄目なの？

そんなの可笑しいよ…！」

「それなら！好きだからって人の幸せを

奪ってもいいわけ！？

あの子は浅木君が好きで勇気を出してやっと付き合えたんだよ？」

「秋華は私の味方じゃないの！？」

違うそうじゃなくて…

私が悔しいのは

気持ちを伝えられない自分がもどかしいから。

好き

それをあの子は言った。

私が言えなかった言葉をあの子は言った。

もし、それを私の方が早く言えていたら私の事を見ていてくれたのだろうか。

「ごめん…。秋華に当たってた…。」

悔しいからって秋華にやつ当たりなんかしてひどい事した。

秋華はまたゆっくりと唯愛を抱きしめた。

唯愛は大声で泣き叫び

秋華を力強く抱きしめた。

廊下に響くチャイムが虚しくこだましていた。

昼休みが終わり五時間目の授業が始まったのだろう。

騒がしかった中庭も静かになっていた。

「ごめんね…。秋華は教室戻りなよ。」

私は目腫れちゃったから教室戻れないし。」

唯愛は寂しそうに笑った。

「今日は唯愛の傍に居てあげる。」

秋華は唯愛の頭を撫でた。

今ここを離れたら駄目だ。

秋華は心の端っこでそう思った。

「天見！横田！何してる。」

2人を探しに来た担任は長々と説教をし

保健室に行けと背中を押した。

「先生。氷ちょうだい。」

「どうしたの。目腫れてるじゃない。」

「失恋したの。」

保健の先生は急いで袋に氷をつめ唯愛に差し出した。

「横田さんは早く教室に戻りなさい。」

秋華はしぶしぶ教室へ戻って行った。

「大丈夫よ。腫れがひくまでゆっくりしていなさい。」
先生の言葉に唯愛はまた涙を流し、目を瞑った。

夕日を見た日には夢を語ってくれた渚音は
今でも同じ夢を追い続けているだろうか。

唯愛が目を開けた頃には夕日で部屋が照らされていた。

「よく寝てたわね。うん、腫れもひいてる。」

これ以上遅くならないように早く帰りなさい。」

先生は優しく笑って唯愛を見送った。

学校を出ると唯愛は1人でゆっくりと歩き始めた。

1歩1歩に力をこめて。

「おい！天見！」

聞きなれた声が唯愛を呼び止めた。

歩くのをやめ、振り返ると渚音があの子と立っていた。

「お前あれから帰ってこないし、」

横田に聞いたら保健室にいるとか言っし。」

「ごめん。ちよっと体調悪くなっただけだから。」

「あの！私2年の多賀谷志乃
つて言います！」

渚音の隣にいた女の子は恥ずかしそうに唯愛に
名前を告げた。

「天見唯愛です。」

唯愛は志乃に対する怒りを抑えながら名前を告げた。
志乃は可愛らしく唯愛に笑いかけ、

渚音の顔を見上げた。

「大丈夫ならいいや。志乃帰ろう。」

渚音と志乃は唯愛に背を向け歩きだした。

私じゃなくて多賀谷さんを名前で呼んでる。

名前で呼ぶのは私だけでいてほしい。

でも、私は苗字で多賀谷さんは名前。

悔しいよ。

私は渚音の何？

私は渚音の支えでありたいの。

唯愛は2人が見えなくなっても見つめ続けた。

もう、渚音なんて忘れない。

自分が自分でなくなるくらいなら

渚音なんて忘れない。

こんな思いをするなら渚音と出会わなければ良かったね…。

第5話：許せない想い…

「ん…」

朝日が眩し過ぎて唯愛は眠たそうに目を開けた。泣き過ぎて目は重く、なんだか体も重く感じた。

「唯愛！起きなさいよ。」

母親の声を無視して布団を被る。

軽やかに階段を上がる音がして部屋を開ける。

「ゆい。いい加減にきなさい。」

布団を取られて、嫌々ながら唯愛は学校へ向かった。

「唯愛？顔色悪いよ。」

秋華は唯愛の頭を撫でた。

「よく学校に来たね。」

唯愛は静かに涙を流した。

「嫌だよ…。本当は学校に行きたくないよ…」

「でも。よく来たね？」

秋華は優しい。

何時も甘えちゃう。

ごめんね？

「無理やり起こされたの。」

「やるね。唯愛ママ！」

秋華は楽しそうに笑った。

「はよっス。」

何もなかったように渚音は明るく教室に入って来た。

「天見、おはよ。」

「…おはよ……」

優しくしないで。

思いだしちゃうから。

だから、

私をほうっておいて。

唯愛は小さく挨拶をした。

渚音の鞆から見えた携帯には、女の子らしいストラップが見えた。

「あのことお揃いなんだ…」

もし

願いが叶うなら

少し前に戻りたい。

ゲームのようにリセットして。

でも、出来ない。

それは分かってる。

分かっているからこそ、辛い…

「もう、嫌になっちゃう。」

唯愛は机に突っ伏した。

授業はつまらなく、唯愛はぼうつとしていた。

ふと、渚音を見ると少し色素の薄いふわふわとした髪を靡かせ寝ていた。

「浅木。起きなよ。」

唯愛は冷たい目で渚音を起こした。

「んー？」

渚音は小さく伸びをし、起きた。

起こしたのは少しでも私を見てほしいから。

唯愛は呟くとグッと握りこぶしを作った。

諦めるはずなの。

だから

渚音は見てはいけない。

忘れなきゃ。

このままなのは絶対に駄目。強くななきゃ。

だけど、諦める方法も足元も真っ暗なのにどうやって前を向くの？

「唯愛ー？お昼どうする？」

「購買行ってくるね。」

唯愛が購買に行くと、渚音と志乃が笑い合って歩いていた。

幸せそうに笑っているのを見た唯愛は、何時までも2人を見つめていた。

購買でパンを買い、教室にもどった。

「唯愛！」

秋華はあせったように唯愛を教室の端のほうに連れて行った。

「秋華…？」

「唯愛…。落ち着いてきてね？」

唯愛はしばらく秋華の顔を見つめてからうなずいた。

「後輩に聞いたんだけど…。」

浅木君と付き合ってる子……。」

唯愛は目を見開き、教室を飛び出した。
向かう先はあの子の所。

許せない。

渚音を利用するなんて…

私は許さない。

第6話：もろい絆：

許す事ができない事も

いつのまにか忘れるときがたまにある。

でも、

それは心のどこかで許していたと言っ事なのだろう。

「天見？」

教室を飛び出してしばらくすると渚音とばったり会った。

「…あの子は？」

「あの子？」

「多賀谷って子！」

渚音は唯愛を軽く睨んだ。

「志乃がどうした？」

秋華は確かに言った。

「浅木君と付き合ってる子…」

金持ちの大学生と付き合ってるらしいよ？

でも、最近別れ話が出てるらしくて…。

浅木君と一緒にいれば相手が妬いてよりをもとせるかもって…。

ここからは私の想像。

金持ちの彼氏を手放す訳がないし。」

「どうして渚音なの…？」

「分からないよ。」

でも、浅木君と何かあるのかもね？」

「浅木は利用されてるんだよ…！」

「はあ？志乃が俺を利用してるって？」

渚音はあきれたように笑った。

「あの子には他に彼氏がいるんだよ？」

「ふざけた事言うなよ。」

「違う！私はただ本当の事言ってるだけだよ！」

「黙れよ！お前は何がしたいんだよ。」

志乃を侮辱して…。

最低だな。

これ以上志乃を侮辱してみろ。

許さねえからな。」

渚音は強く唯愛を睨み怒鳴りつけた。

「あの子の事好きなの…？」

「…当たり前だろ。」

渚音は立ち去った。

「嘘…私が悪いの…？」

唯愛はその場にうずくまった。

「嫌だよ！」

大声で泣き叫び

周りの人を気にせず泣き続けた。

私はただ渚音のために言っただけなのに…。

そう言う事じゃなくて

あの子を好きだと言うのを信じたくなかった。

ただ、私よりあの子のほうが早く

好きだと言っただけだと思ってた。

思っていたかった。

だけど、思い知らされて。

渚音に嫌われて。

最低と言われて。

そんなにすぐに崩れる絆だったというのが哀しくて。

「嫌だよ…！！！」

悔しくて。

すぐに泣いてしまう自分が情けなくて。

「天見！何してる！」

先生の声にハツとし、唯愛は涙を拭き立ち上がった。

「何があつた？こんな所で大泣きして、

迷惑をかけているとは考えないのか？」

頭ごなしに怒鳴る先生を横目に唯愛は走り去った。

今はただ哀しくて泣き叫んだ。

だけど、すごく恥ずかしいことで…

「ほんと情けない…」

気持ちが悪くすぐに行動に出してしまう、幼児のようだ。

あまりにも、恥ずかしい。

悔しくて

ショックで

哀しくて

どうしようもない。

甘えていてもしょうがない。

あの子が好きなら必死に自分のものにして。

泣いて「ごめん」なんて言っても許さない。

渚音が傷つくところは見たくない。

でも、最低と言った貴方をそう簡単に許す事はできない。

私が悪いなんて思わない。

私は私なりに渚音を守ったつもりだったから。

すぐに最低だなんて言えるほどの

私たちの絆。

負ける訳にはいかない。

何て言われても私は渚音の

涙をみたくないから

渚音を助けたいの…

第7話：伝えたい想いは言葉で…

どうか渚音が悲しみませんように…

燃えるように赤い夕日が沈むとき渚音が話した夢。

「俺さ、将来の夢ってのがずーっとなかった。

でも、皆と騒いで笑って泣いて…。

これが何時かなくなってしまう、消えてしまうつて。

それが怖いと思った。

だから。

将来の夢って言うほど重いことではないけど

今の夢は少しでも長くこうして居られる事なんだよな…」

恥ずかしそうにハニカミながら話した渚音の事は何時までも忘れな
い。

だけだね。

私の中にあつた短い『渚音との絆』は

もう消えてしまったのかな？

違う。

もともと私達には絆と言えるほどのものはなかった…それが死ぬほ
ど悔しい。

私はもつと頑張れた…

唯愛はそのまま家に帰った。

家には誰も居ず、ただ生暖かい空気が漂っていた。

「また腫れちゃった…」

ポツリと呟いた言葉は、虚しく消えていった。

唯愛は目を冷やしながらテレビをつけた。

なにか音がないと駄目になるような気がした。

何度か見たことがある政治家が難しい言葉を話している。

それに耳を傾けながらぼうつとしていると

携帯がうるさく鳴り始めた。

「…はい…？」

「唯愛！？今どこ！？」

息を切らした秋華の声がする。

「家…。」

「そっか…。先生カンカンで唯愛の家に電話かけに職員室に行ってるの。」

秋華が話すとたんに家の電話が鳴った。

「ごめんね…？落ち着こうと思ったけどなんか…。」

「ううん。良いよ？」

どれくらい沈黙が続いただろう。

沈黙を破ったのは唯愛だった。

「…話。聞いてくれる？」

涙で潤んだ目は今にも涙がこぼれそうだった。

「もちろんだよ。」

秋華の優しい声に唯愛は安心した。

「唯愛？」

ちょうど学校が終わった時間に秋華はやってきた。

ドアを開けると少し髪が乱れた秋華が居た。

走って来たのだろう、息も少し荒かった。

秋華をリビングに案内した。

「大丈夫？顔色悪いし…。」

「大丈夫だよ。ちょっと落ち着いたし。」

唯愛は力なく笑い、テレビを消した。

しんとした部屋はなんだか虚しかった。

「あのね…。」

唯愛は話し出した。

「そっかあ…。うん。浅木君の言うことも分かる。

自分の恋人の事を悪く言われたら怒るよね。

自分が知らないことを言われたらなお更。」

唯愛は俯いた。

「だから。

分かってあげよう？

唯愛の事が嫌いだから言った訳じゃないから。大丈夫だよ。

浅木君の気持ちは私より唯愛の方が知ってるでしょ？」

「…分かるよ？私だって渚音が最低だって言う理由分かるのに…
なのに先走っちゃって、怒らせた。

だけどそれが悪かったなんて思いたくない…。

悪いって思ったら、本当に駄目になりそうで…」

唯愛は小さな身体を震わせていた。

「唯愛は浅木君の気持ちを分かってあげてる。

なら、今はそれで良いと思うよ。

浅木君にも唯愛の気持ちを分かってもらうべきだよ。

唯愛は分かってあげてるのに

浅木君は分かってくれないのは、駄目だと思うから。」

秋華が優しく笑うと唯愛は泣いてしまう。

秋華が親友でいてくれる。

それが力になる。

「私はどうしたら良いの…？

許せないの。

あの子の事も渚音の事も。

分かっているはずなのに…！」

「それって、自分を許せないんじゃないの？

2人を許せないんじゃないでしょ？」

唯愛ただ涙を流した。

「謝ろう？」

まずは、謝って唯愛の気持ちを伝えよう？

好きって言わなくても良いから。

あの子の事を侮辱した訳じゃないって言うの。
唯愛。

大丈夫。

私は唯愛の見方だから。」

唯愛は泣き続けた。

ありがとう。

と、言いながら。

本当に伝えたい事は口で言う。

心の中で言うのは何も伝わらない。

だから。

たくさんありがとうと共に
気持ちを伝えるんだ。

第8話：感謝と恨み…

明日は笑って過ごせるように
悔いが残らないように
毎日の精一杯努力をする。
辛いことはきつと意味のあることだから。

秋華が帰った後、
担任や両親にこっぴどく怒られた。
だけど、そんな事はまったく気にならないくらい
唯愛は渚音の事を考えていた。
謝らなければいけない。
これも、全て自分が先走ったせいだ。と、
唯愛はただ俯く事しかできなかった。

部屋に戻ると携帯を握り締め、じいっと見つめた。
謝るのをやめようか。そんな思いが頭をよぎる。
だけど謝らない限りこれは終わる事はなくて。
逃げてしまいたい。
自分を裏切っているかもしれない恋人を好きだと言う渚音。
もし、その思いが裏切られるような事があれば
渚音はどうするのだろうか？
涙を流すのかもしれない。
ただ、呆然と立ちつくすのかもしれない。
崩れてしまうのかもしれない。
どれにしろ、
傷つくに決まっているのだろう。
そんな渚音を見たくない。

それだけなのに、『最低』だと言われてそれが簡単に
「ごめんなさい」

なんて言える訳がない。

だけど、唯愛が渚音を傷つけた事には変わりはないと
唯愛は小さく呟いた。

少しの間でも、先に告白すれば付き合えたと思いたい。
志乃の事が好きだなんて思いたくない。

ただ、先に告白しただけ。

まだチャンスはある。と思いたい。

でも、

渚音はあの子が好き。

そう言っただ。

本当に好きなら、その人の笑顔を、幸せを
願うものだ。

だから、渚音が笑っているならそれでいい。

唯愛はふつと笑った。

「その代わり渚音を悲しませたら許さないから。」

渚音が好きだから、幸せになってほしい。

だからこそ

自分が嫌われても渚音が悲しまないように

志乃をなんとかしなければいけない。と唯愛は心に決めた。

「そのためにも謝らないと……。」

唯愛は携帯の番号を押し始めた。

唯愛は学校の近くの公園に向かった。

「……もしもし？天見？」

「あ…。えと…。話せるかな？」

「今から？」

「…出来れば…。」

「いいけど。どこで？」

やはり渚音の声は低く冷たかった。

「…学校の近くの公園でいいかなあ？」

「分かった。今からでいいか？」

「うん。…ありがとう。」

唯愛は歩くのを止めた。

やはり会いにくい。

だけど、前を向くしかない。と、歩き始めた。

唯愛が公園に着いた頃には渚音はブランコに座っていた。

「…浅木…。」

小さな声で唯愛が呼ぶと渚音はハッと唯愛を見た。

「隣…。いいかな？」

「あ…。ああ。」

唯愛は渚音の隣のブランコに座った。

2人は目をあわす事も話すこともせず、

ただブランコを揺らしていた。

「今日は！ごめん。」

唯愛は顔を真っ赤にして話した。

「勝手な事を言っ…。」

本当にごめん。

…。多賀谷さんを馬鹿にしたり、侮辱ぶじよくした訳じゃなくて…。！

「確かにお前にはムカついたし、

でも、俺もカッとして。それは悪かったと思う。」

渚音は唯愛をじっと見た。

「俺は、天見を許せない。」

唯愛は目を見開いた。

「え…？」

「志乃のことが好きだから。お前が侮辱した訳じゃないとしても、軽はずみだったとしても許せない。」

違う。

どうして許されない。

確かに悪いことをした。

なのに、謝ったのに、どうして。

渚音が謝るべきじゃないのか。

唯愛の頭にいろいろなことが流れこむ。

「いやあ…！」

唯愛は頭を抱えた。

「私は謝った…！分かってよ！私は分かってるのにどうして分かってくれないの…！？」

「おい！天見？」

渚音は立ち上がり唯愛に駆け寄った。

「嫌だよ！」

「天見！」

ただ。

志乃に謝ってほしいと思ったただけなのに。

志乃に謝れば許すと言うはずなのに。

渚音は心の中で叫んだ。

「どうして…私が全部悪いの？」

「天見…。」

渚音は壊れていく唯愛をただ見つめる。

「天見。天見。天見。」

名前を呼び続けるが、唯愛の耳には届かない。

「…唯愛。」

ピタリと唯愛の声が止まった。

「唯愛。」

唯愛は涙に濡れた顔で渚音を見つめた。

「志乃に謝れ。そしたら許すから…。」

「許してくれるの？分かってくれるの？」

「分かるよ。お前がどうしてあんな事を言ったのか分からない。でも、今回は志乃に謝る事で許してやる。」

「私の気持ちは分かっ…」

「分かるから。だから、落ち着け？」

涙はなくなりはいしないのだろうか？

泣きすぎたけど、涙は枯れないで泣こうとおもったら
いつでも涙がながれる。

嫌でも泣ける。

涙は枯れてはくれないのだろうか？

「てか、俺偉そうだな。ごめんな。」

渚音はしゃがみこんだ。

恥ずかしそうに髪をいじった。

「ごめんね…。」

唯愛の小さな謝罪に耳を傾けながら空を見上げた。

「俺、空好きだな。」

どこまでも続く空が好き。

広く青い空が好き。

高く澄んだ空が好き。

「なんか食いに行くか。」

渚音は空が好きだと小さい声で言い、
打って変わって明るく唯愛に笑いかけた。

唯愛には、なぜ空が好きだと呟いたのか分からなかったが、

食べに行こうと言ってくれたのが何よりも嬉しく思った。

「うん！」

唯愛と渚音は近くのファーストフード店へ向かった。

「しょうがないから俺がおごったる。」

「めずらしい…。」

「うつせ！もうおごってやらねえ。」

「え！ごめんって。」

2人は以前のように話すようになっていた。

「氣い付けて帰れよ。」

「うん、バイバイ。」

もう、暗くなつた頃に唯愛は渚音と別れた。

渚音は唯愛の家の近くまで送って行つた。

軽く手を上げて渚音は帰っていった。

小さくなる背中に唯愛は叫んだ。

「ごめんね…！！」

唯愛が夜道を帰っていると、

見たことのある影が通り過ぎた。

ぱつと振り返ると、志乃の姿が見えた。

追いかけようとすると、志乃は背の高い人と手をつないだ。

「志乃。好きだよ？」

前に別れようって言って悪かつたな。」

「いいよ。私が好きなのは貴幸たかゆきなんだから。」

「じゃあ、あの男は？」

「友達だよ？」

『利用しただけ』

という言葉が頭に流れる。

あの男？

渚音のことに決まってる。

あいつが秋華のいう大学生の彼氏。

唯愛は2人の後ろ姿をただ見つめていた。

第9話：カタチだけの愛…

身体が勝手に動く。

頭は真っ白で

体は硬直してるはずなのに動いた。

気付いたときには志乃の前に飛び出していた。

「多賀谷さん…？」

「え…？」

男はうつとうしそうに唯愛を見て、首をかしげながら志乃を見た。

「貴女にとつて浅木渚音はなんなの？」

何故か口が動く。

また、先走ってる。

駄目だ。またやつちゃってる。止まれ。唯愛の気持ちと裏腹に口が動く。

「天見…先輩ですよ？貴女こそ急になんですか？」

「私が聞いてるんですよ。」

男が何かを言おうと口を開く。

しかし、志乃がそれを止めた。

「貴女に関係ないと思います。でもあえて言うなら渚音先輩は、友達です。」

「付き合ってんじゃないの？」

「さつきから何言ってるの、君。消えてくんない？」

男は冷たい目をした。

「確かに私は渚音先輩に好きだと言ったかも知れない。でも、本気にするなんて馬鹿馬鹿しいですよ？そうは思いません？」

人の気持ちをもてあそんで。

「普通、好きだと言われたら信じるでしょ。一緒にいると付き合う事じゃないの…！？」

「へえ。なら、渚音先輩は遊びですね。そんな人とは釣り合わないですよ。あんな人。」

ふざけるな。

ふざけるな。

ふざけるな。

ふざけるな。

「利用したなんて変な事言わないで下さいね？向こうがおかしいんだから。」

「…アンタが可笑しいんですよ。」

唯愛は大きく目を開き、次の途端冷たい目で志乃をにらんだ。

「…それを、利用したっていうんじゃないの！？その男が本命なんでしょ！？なら、どうして渚音に手え出すのよ！？言いなさいよ！」

唯愛はジリジリと痛む喉から自分の声だとは思えないがら声で叫んだ。

「てめえ。黙れよ。」

低くドスのきいた声で男が言う。

「良いよ。これは私の問題だから。」

志乃は渚音に見せた笑顔と全く同じ笑顔で男に笑いかけた。

男は渋々ながら、志乃に軽いキスを送り立ち去った。

「私には好きな人がいた。それは本当です。」

志乃は冷静に悪びれもなく話し始める。

「渚音先輩は、ただ少しの間の『彼氏』です。」

「意味わからない。」

志乃はイヤらしく笑ってみせた。

「私は1人が嫌いなんです。寂しいのが嫌い。だから、一緒にいてくれるなら誰でも良かった。それで彼氏も戻ってくるなら一石二鳥ですよ。」

志乃はベラベラと息をつく間もなく話し続ける。

「渚音先輩がどんどん私にはまっていくのが分かった。ホント馬鹿

馬鹿しいですよ。」

「それが…」

「は？」

「それが利用してる、って言うんじゃないの！！」

バチっ！

と、鈍い音がした。

「何すんのよ！！！」

唯愛は志乃を叩いていた。

「そんな理由で渚音を傷つけて、アンタにそんな事する権利があるの！答えなさいよ！！」

涙で汚れた顔を必死に怖くみせた。

「アンタこそ！アンタに叩かれる筋合いないわよ！？廊下で泣き叫び、アンタこそこうやって別れさして渚音先輩と付き合うつもりなんでしょ！？アンタだって自分が1番大切なんでしょ！？」

志乃は思いっきり唯愛を叩いた。

「つつ…！」

言い返す事はできなかった。

渚音を守るためとか言って、でもそれは自分が渚音といたい気持ちからの行動。凶星をつかれた。

唯愛が息を切らしながら悔しそうに顔をゆがめると、志乃も息を切らしながら勝ち誇ったように笑った。

「ほら。アンタと同じじゃない。」

「ちがつ…。」

「何が違うのよ！？アンタだって、私を利用して渚音先輩と付き合いおうとしてる！」

「もとはアンタがつ！」

もとはアンタが悪い。そう言おうとした。

だけど、唯愛は言えなかった。

悔しい。悔しい。

アイツが悪いのに。

唯愛はまた涙が溢れそうになった。
必死にそれを抑えた。

泣いたら負けだ、そう言う気持ちがずっと心にあった。

「私は渚音に謝って、別れてほしい。それは私のためじゃなくて、渚音を傷つけないために。」

「…そういうのがム力つくのよ。そこまでして…。気持ち悪い。」
踏みにじられた。

渚音に対する気持ちが。

唯愛は小さく舌打ちをした。

「私は確かに利用したと言われるかも知れない。でも、アンタほど根性腐ってないわよ。」志乃は強く唯愛をにらんだ。

「私が腐ってる？渚音先輩に言いつけますよ？」

アンタより私の方が信頼されてる。

だって、渚音先輩は私が『好き』なんですものね。」

「やめてよ！」

なんで渚音に言う必要があるのよ！？」

「私を侮辱したからです。」

きつと渚音先輩は怒りますよ？」

唯愛の頭に壊れていくさっきの自分が浮かぶ。

渚音を傷つけて、泣き叫ぶ、可笑しくなった自分。

「自分の気持ちを伝えることもできないくせに。」

これ以上話す事がないなら失礼します。

『デート』中なんで。」

ただ、志乃の背中を見つめることしかできなかった。

そこに、愛しい影が見えた。

「渚音？」

「名字で呼べって言うてるだろ？つか、不細工な顔。」

渚音は子供っぽく笑ったが、悲しそうに視線を落とした。

「ほら。携帯。俺のチャリのかごに入ってたままだったぞ。」

「…ありがとう。…いつからいたの…？」

「今さっきだよ。悪かったな。お前の言ってたの、信じれば良かったな。大丈夫か？」

渚音の方が辛いはずなのに明るく振る舞う渚音を唯愛は見えていなかった。

唯愛は背伸びをして精一杯手を伸ばし渚音を抱き締めた。

「何だよ！」

唯愛は何も言わずにただ涙を流し抱き締めた。

「離せよ。」

「…辛いなら笑わないでよ…。見てるの辛いよ…。ごめんね…ごめん…。」

渚音は少し抵抗をしながら呟くように離せと言った。唯愛はごめんなを小さな声で連呼した。

「離してくれ…。」

少しずつ渚音の声が鼻声になってくる。

渚音は静かに涙を流し始めた。

「渚音。泣いてもいいんだよ…？」

唯愛の言葉をきに渚音は声をたて泣きはじめた。

「…ちく…しゅっ…」

唇をぐつと噛み、悔しいと呟く。

唯愛は何かできる訳ではないけれど、傍にいたいと思った。

自分に対する罪悪感がある。

可哀想と同情する気持ちもある。

だから私が言ったのにとあきれる気持ちもある。

唯愛は色んな気持ちが混ざり合う。

「…ありがとう。」

どれくらいかたった頃、渚音はゴシゴシと目を擦りながら謝った。

そして、地べたに座り込んだ。唯愛もそれに合わせて座った。

「あのさ。俺、告白とかされたの初めてで。…自惚れてた。だからとか言い訳なつもりじゃないけど、アイツが好きでいてくれんなら俺も好きだって思い込んだ。」

渚音は気まずそうに眉をしかめた。

「カツコ悪いけど、好きだって言うのが裏切られた感じがした。それが悔しくて、情けなくて。」

渚音は空を見ながら立ち上がった。

「あゝあ。せつかく好きになろうとしたのに。情けない。」

「…あの子の事、好きじゃなかったの…？」

唯愛は渚音を見上げた。

「どうなんだろ…。今になってはわからない。」
でも…

渚音は小さな声で続けた。

「アイツがほんの少しでも、俺が好きだって、居てくれてよかったって思ってくれるならそれで良いと思う。アイツが許せないとしても、少しでも好きかなって思った奴が幸せに、笑ってくれんならそれで良い。」

「馬鹿じゃないの…。」

少しでも心通わせた人よ、どうか幸せで。

どうか笑顔で。

形にはまった愛なんて寂し過ぎる。

傷ついて、傷つかせ、涙を流す。

一人ひとり違う思いを持って、違う形を持つことで心通わせる。

想い人は儚く《はかなく》散っていくものだから。

だから、今を大切にして傍にいる人を愛す。

少しでも心通わせた人よ。どうか、幸せで。

どうか、笑顔で。

たった1つ願いが叶うなら、2人で過ごした楽しい思い出を少しでも覚えていてほしい。

第10話：凜…

どうして、俺なのだろうか。

どうして、好きだと言ったのだろうか。

どうして、寄り添ってきたのだろうか。

疑問は尽きない。

だけど、はつきりと分かっているのは俺は彼女に溺れていたんだ。

「渚音？」

「ん…？ちゃんとやってきたよ。」

渚音が別れを告げると、志乃は気が済むまで怒鳴り散らした。

志乃の叫びは渚音に対してではなくどこかあの男への報われないおもいだった。

ただ、あの男が好きだったから別れなくなかった。

だから、渚音を利用した。

それが悪いことだって分かっていた。

それをどうしたらいいのか分からない子供のように怒鳴っていた。

渚音は哀れそうに、どこか愛おしそうに志乃を見つめていた。

志乃は好きなだけ怒鳴ると、「ん…。」と

小さくうなずき立ち去った。

それは別れを受け入れたという返事なのか、

ありがとうか、

渚音を恨むことなのか渚音は分からなかったが

悲しそうに笑った。

「多賀谷つてさ、ただ寂しかったんだろうな。

ちょうど俺がいたから俺を選んだだけなのかもな。」

もう『志乃』と呼ばない渚音を唯愛は見つめることしかできなかった。

寂しい。

寂しい。

別れたくない。

傍にいたい。

志乃の想いはそれだけだった。

「お前にも悪い事したな。ごめん。」

渚音はゆっくりと空を見上げた。

「ありがとう。」ありがとう。

傍にいてくれてありがとう。

渚音はそう呟いた。

「キザ！」

「あ？せっかく礼言ってやってるんだろ！」

いつも通りちよつとした事で言い合いをして、最後は笑い合う。

そんな当たり前な事が唯愛にとっては幸せな事だった。

簡単なものこそ難しくて、壊れやすい。

時間がかかって築いたものも、壊そうとすれば直ぐに壊れる。

それほど人は優柔不断で、バカな生き物なのかも知れない。

そんな所も含めて、人間は愛しいもの。

それを分かっている人間が一番強い。

「ねえ…？人間てもろいものだね？」

渚音はじいっと唯愛を見つめた。

「だな…。だからこそ面白いんじゃない？」

「ははっ！！そうだね！！」

渚音は携帯を取り出し、あの女の子らしいストラップを引きちぎった。

いろんな色のビーズが飛び散る。

「もう、いらねえな。」

面白そうに笑う渚音は出会った頃とは変わらなかった。

「おらっ！」

渚音はストラップを窓から投げた。

そして、携帯をいじった。

「アドレスもゼーんぶ消したし、ストラップもないしすっきりした。」

放課後だと言っても、もう遅く残っているのはグラウンドにいる野球部くらいだった。

ふたりきりの教室は夕日に照らされて眩しく思えた。

「雨…。」

「え？」

「雨。降らねえかな。」

「なんで…？」

雨なんか降る気配はなかった。

「なんででしょう？」

悲しいからだよね？

渚音は空が好きだから、自分色に空が変わってほしいんだよね？

唯愛はそう思ったが口に出さなかった。

次の日、唯愛が学校に行くと教室が騒がしかった。

「どうしたの？」

「転校生が来るんだって！」

それもすつごく顔の整った男の子らしいよ！」

「この時期に？可笑しくない？」

「まあまあ。そんな事どうでもいいでしょ！」

唯愛は少し納得できなかったが気にはしなかった。

「はい。転校生を紹介します。どうぞ。」

先生の声と同時に教室のドアが開いた。

女子を中心に、男子も『おお』と声を出した。

教室に入ってきたのは、

キレイな明るい金髪を肩より少し長い髪をした男の子だった。

小さな顔に大きな瞳。長いまつげに、どのパーツも

美しく並んでいた。

男の子と言わずに、制服でなければ女の子に見える。

それも、そこのアイドルやモデルよりも可愛い。

「睦月真凜です。むつきまりん」

こんな時期に転校してきて可笑しいですけど、

よろしく願います。…あれ…？」

真凜は自己紹介の途中に目を見開き渚音の方をじっと見た。

「渚音？」

「なんだ。浅木、睦月と知り合いなのか。」

睦月、浅木の隣の席に座れ。以上！」

真凜は渚音の隣に座ると、懐かしそうに笑って話し出した。

先生の長い話が終わると、たちまちに真凜の周りには人が集まった。別クラスの生徒達もどこからかぎつけたのか廊下から教室内を覗い

ていた。

その中で真凜はしばらく無邪気な笑顔で笑っていたが、すくつと立ち上がった。

そして口元に笑みを浮かべながら唯愛の席に近づいた。

「天見さんだよね？」

別れを知って、出会いを知る。

それが人生、そして、運命。

笑顔でいても心の中は違って…。

どんな運命であろうとも、『私』は『貴方』と出会い辛いことも嬉しいことも傍にいたいと願うのだろう。

それが運命だから。

そう信じたいから。

そんな運命を歩みたい…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2054f/>

永久への想い

2010年10月9日01時13分発行